

本当に出勤しなかった日の三編

江添佳代子（そね）

あるグルーマーの独白

あるグルーマーの独白

周囲の人々が私をシロと呼ぶので、たぶん私はシロという名前の猫だ。

ひよつとしたら「シロ」というのは本名ではなく愛称なのかもしれない。しかし自分が「猫だ」という点については絶対の自信がある。

なぜ私は、自分が猫であることを断言できるのか。なぜ「自らの存在を猫なのだと思ひ込み、にゃーんと呟いて現実逃避をしている中年男性」ではない、と心の底から確信できるのか。そこには複数の理由があるが、決定的な証拠の一つとして挙げられるのは自分のゴロゴロ音だろう。ゴロゴロ音。あれはいいものだ。

自分のゴロゴロ音を聞いていると気分が穏やかになる。その幸福感で、さらにゴロゴロ音が強くなる。このゴロゴロ音によってゴロゴロが高められていく感覚は、ネコ科の一部の動物だけが体験できるものではないかと思うのだが。あえて人間に喩えるならば、いったん泣き出してしまった

人間の子供が、自分の泣き声の悲痛さに驚いて感情を昂ぶらせ、いつそう激しく泣くメカニズムに似ているかもしれない。あるいはストレス社会を必死で生きている中年女性が、心理カウンセラーと面談しなければならぬ羽目となり、仕方なく自らの境遇を説明しているうちに、自分があまりにも哀れな存在であるかのような気分になってきて、いま抱いている気持ちを少々大げさに盛りながら語ってしまう現象に似ているかもしれない。

なにやら悲しげな喩えばかりになってしまったが、もちろんゴロゴロ音には陰難さがないので安心してほしい。そうなのだ。もし人間にゴロゴロ音を発する器官が備わっていたら、おそらくは心理カウンセラーなど……まあ、それはともかくとして毛繕いをしよう

毛繕い

毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い

毛繕い毛繕い毛繕い 毛繕い

……申し訳ない。何の話をしていただろうか？ ああそうだ。私は猫であるという告白の最中だった。その告白をするに至った経緯は少しも思い出せないが、だからといって支離滅裂な奴だとは思わないでほしい。それは私の思考パターンが出鱈目なせいではない。漱石の猫だって何の

理由も説明せぬまま、唐突に身の上を語っていたではないか。そういうものだ。

そもそも「あれ、なんでオレ、いま頭の中でバーモントカレーの西城秀樹の物真似をしてるんだろ」だとか、「どうして私はいま、ジャワカレーを食べているときの千葉真一の顔を思い出したんだっけ？」みたいな混乱を覚えることは、人間にも頻繁にあるはずだ。それくらい大雑把でゴチャゴチャしたものが、我々の脳内の大半を占めているのではないかと私は思う。たとえば終わりなき民族紛争や資本主義の限界について、あるいは食糧難の時代について、論理的な考察を深めている真面目な人物であっても、普段は子どもの頃に見たアニメ番組の最終回や、それほど仲が良かったわけでもないクラスメイトの渾名のこと、あるいは一度だけ地上波で見た国広富之のエレファントマンの吹き替え、そういったものにダラダラと考えを巡らせている時間のほうが長いのではなからうか。「おや、つい数分前までの私は天安門事件について考えていたはずなのに、どうしていまは落合野球記念館のことを調べてるのかな？」とたまたま気づいたときだけ、自分の思考プロセスの突飛さに驚くのだ。普段から同じことをしているにも関わらず。

とはいえ、私は決して「まとまりのない思索に時間を浪費している人類は愚かだ」と言いたいのではない。むしろ発想の伸びやかさを喜ぶべきだと思う。しかし残念ながら、人間というのは猫ほど高尚な生き物ではないため、あ、ちよっと待って、毛繕いするから

毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い
毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い
毛繕い

申し訳ない。たまにこれをやらなければ私は私でいらなくなってしまうので、できれば許していただきたい。

念のためにお伝えしておきたいのだが。さつきから私は、傍若無人なふるまいを貴方にわざと見せつけることで主導権を握ろうとしているのではない。気ままで自由なライフスタイルを誇示したいわけでもない。たとえ私が自分語りの最中に毛繕いを始めてしまったとしても、できれば失礼だと怒らないでほしい。「真夜中に電話をかけてきたのに、話の最中で勝手に寝てしまう友人に似ている」などとは思わないでいただきたい。

我々の祖先は、狩りにチームワークを必要としなかった。その最終形態とでもいうべき愛玩動物の猫が、相手の顔色を窺わずに行動するのは当然のことだろう。コミュニケーションにおける協力的な態度、キャッチボール形式で行われる情報交換の習慣、そういったものに我々は慣れていない。そんな私を許容できる寛大な相手として、私は貴方をリスペクトし、信頼しているのだということをご理解いただきたい。だからこそ、貴方に告白しよう。毛繕いというものは、あれ

は本当に良いものだ。

暇さえあれば毛繕いをしている我々の姿を見ても、おそらく貴方は「ははは、まるで自慰行為を止められなくなつたチンパンジーだな」とは思わないだろう。それを信じたうえで語るなら、猫の毛繕いというのはまったく素晴らしい。猫が猫である喜びを、あれほどダイレクトに味わえる動作は他にないかもしれない。なにしろ猫が猫を毛繕いしているのだから。

一度だけで構わない、少しだけで構わないから、ちよつと真剣に想像してみたい。人間がてのひらで猫の頭を撫でるだけでも、たいそう心地よくなれるというのに、「猫が」「猫を使つて」「猫の全身を」毛繕いしてしまつたら、それがどれほどの快樂になりえるのかを。

毛繕いをするときの私は、うつとりと目を細めて細長い桃色の舌をのばす。あの無数の突起を生やした繊細な薄い舌で、猫の柔らかな被毛を隅々までなぞりたおしていくのだ。そして私は猫の歯で、まるでミニチュアのトウモロコシの実を並べたような前歯で、肉球の周辺部を噛みしめ、尾の先端の毛をガシガシと整えていく。さらに私はしなやかな腕を、あのいかにも猫らしく先の丸まつた腕を見せびらかすようにかかげ、その内側を余裕たつぷりに舐めあげる。かと思えば、その腕をすぐさま猫の後頭部にあてがい、迷うこともなく前方へ向かつて頭を撫で下ろしていく

のだ、パタンとした猫の耳の感触を楽しみながら。

こんなのもう、何もかも猫だ。ぜんぶ猫。ここに猫のすべてがある。たいへんだ。いま私は猫である、というより私こそが猫だ。猫が猫という生き物を無我夢中で満喫している。私は猫に没頭している、いまの私には、ハウス食品のカレーのコマーシャル映像を思い出す余裕などない、なにしろ猫である私が、私という猫を……

……まさかとは思うが、興ざめされただろうか。引かれてしまっただろうか。

ひよつとすると「それじゃあただの変態じゃないの。うちのミケちゃんはグルーミングの最中にそんなことを考えたりしないわ」と不愉快に思われた方がいるかもしれない。気分を害したのなら謝ろう。なにしろ私には、他の猫と意見を交換した経験が一度もない。つまり貴方の可愛いミケちゃんの気持ちなど私には知る由もないということは明言しておこう。

しかし、それでも私は信じている。この世に存在するすべての猫が、私と同じように「ふおおお、猫じゃん、やつべえ、おれ猫じゃん。猫！ 猫！ 猫！」と歓喜に打ち震えながら毛繕いをしていのだと。

なにしろ我々はいかなるときでも——たとえば不安に陥りそうなときでも、重圧に押しつぶされそうなときでも——すぐさま自分自身が猫である喜びを全身で確認し、あっさりと悦楽に浸る

ことができるのだ。何の感想も持たず、それを淡々とやる理由がどこにあるというのか、私にはさっぱり分からない。

私は死ぬまで毛繕いに飽きることがないだろう。猫の身体は、まるでテーパーバークだ。あらゆる部位が美しく、ときに柔らかく、ところどころ硬く、すべてとしていて、それでいてふんわりしていて、なだらかで。さらに毛繕いの動作も変化に富んでおり——そう、たとえば喉のすぐ下あたりだ。ここを手入れするときの私は、反動を利用する形で大きく頭部を動かさなければならぬ。舌を全力で突き出しながら、助走をつけるように軽く天を仰ぎ、逆三角形の頭を勢よく振り下ろして喉元を整えていく。それを何度か必死で繰り返しているうちに——ただでさえ、撫でられたとき気持ちのよいエリアだということを忘れなく——私はいつの間にかトランス状態にも似たような心持ちに陥って、そのヘッドバンギングのごとき振り下ろしの行為を何度も何度も激しく繰り返さずにはいられなくなり、やってもやっても、やればやるほど、ああ、もう思い出すだけで

毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い
毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い

毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い 毛繕い

最高だ。眠いから寝る。

二〇二〇年十二月九日執筆、二〇二〇年十二月十一日加筆修正

定例総会（前編）

定例総会（前編）

「それでは、第六部隊の活動報告を」

司会に促された白玉は、ステージに上がって会釈をした。やや緊張した様子で資料を取り出し、パラパラとページ数を確認すると、ふたたび軽く会釈をしてから口を開く。

「白玉です。会則に則り、挨拶や前置きは省略して報告を始めさせていただきます。」

……K県S市西区桜橋四丁目に所在する桜橋公民館で、昨年夏から建替工事が行われております。昭和四十五年に建築された同公民館に関しては、耐震補強の必要性が指摘されてきたことに加え、建物の老朽化が進んでいるという点も考慮されたため、かなり大掛かりな規模での工事が行われているのですが」

そう言いながら、白玉はおもむろに黒頭巾の裾をめくって片手を差し入れ、顔を見せないまま器用にメガネの位置を直した。

「この工事が、今月からようやく外装に取りかかりまして、先週末には一階東側の非常口部分、

わずか四段のみの階段を施行するためのコンクリート打設が行われました。私の率いる第六部隊は、その短い期間を狙ってやんちゃを実行いたしました」

白玉は手元のスイッチを押す。

巨大なスクリーンに無機質な灰色の階段の写真が投影される。

のつぺりとした、幅の広いコンクリート階段。その一段目、目立たない隅の部分に、小さな模様のような凹みがある。彼が再び手元のスイッチを押すと、その凹みだけが大きく表示された。

「こちらが拡大写真になります」

「……これは何かね？」

司会の三杯酢が、気の抜けたような声で尋ねる。

白玉は誇らしげな様子で——とはいえ黒装束姿に黒頭巾を被っている我々には、互いの表情を推し量ることができないが——声をうわすらせながら答えた。

「これはハリモグラの足跡です。実物大の足跡を完璧に再現しました。犬や猫の足跡とは少しも似ていないでしょう？」

「つまり……君の第六部隊は公民館の階段に、その動物の足跡をつけた。それだけか？」

「はい。非常にシンプルなやんちゃに聞こえるかもしれませんが、ここには実に多くの可能性が秘められています。まずは」

「あの。失礼かとは思いますが。白玉さん、本気で言ってます？」

まだ報告の途中であるにも関わらず、最年少メンバーの角煮が呆れたように声を上げた。

「だって今日、総会ですよ。この場には会長もいらしてらるんですよ？ 晴れの舞台で第六部隊に発表の機会が与えられた。それは事前に分かってたはずですよ。これ、会長の前で報告できるやんちゃですか？ コンクリートに足跡つけるとか名前を彫るとか、そんな、昭和の小学生でもあるまいし」

厳かな空気を無視するような明るい声だ。どうも最近の角煮には、不遜な態度が目立っている。それも無理はないだろう。この数年間における角煮の活躍は目覚ましいものだった。誰もが感嘆せずにはいられない、大胆で鮮やかなやんちゃを繰り返してきた彼の手腕は、私も大いに認めているのだが。

いまの角煮に私が苦言を呈することができるとしたら、それは今夜だけなのかもしれない。

「ひとつ、よろしいかな」

ホール二階の幹部席。その最前列に座っている私が口を開いたとたん、一階席の黒装束のメンバー全員が一斉に振り返って私を見た。みな驚いているようだ。定例会談の最中に、我々幹部が口を挟むことは珍しい。まして会長の私が発表を中断させたことなど過去に一度もない。

「会長……あの……お気に触りましたか、私のやんちゃが」

あきらかに震えた声で、白玉が私に尋ねる。私は小さくかぶりを振った。

「いや、心配しないでくれたまえ。私は君の報告の続きを楽しみにしているよ」

白玉は安堵したように息をついた。しかし他のメンバーたちは「それならば、なぜ貴方が？」とでも言いたげに私を見ている。私は軽く咳払いをしてから話を続けた。

「……諸君。大事な報告を中断させることになってしまつて申し訳ない。迷惑な老害だと笑つて許してもらいたい。ただ私はどうしても、この機会に一つだけ確認しておきたくなつたのだよ。とても基本的なことをね……諸君にとつて『やんちゃ』とは何だ？」

私が言い終わるや否や、糠漬けが立ち上がり、怒鳴るような声で叫んだ。

「やんちゃとは……やんちゃとは！ 窮屈な浮世に開けられるべくして開けられた風穴です！ それを見たメンバーたちも次々と立ち上がつては、我先にと叫びはじめる。

「やんちゃとは！ 無秩序と秩序を繋ぐ糸です！」

「やんちゃとは！ 面従腹背の精神を捨てられぬ者のささやかな抵抗です！」

「やんちゃとは！ ギリギリで許容される反社会的行為です！」

「やんちゃとは！ 腕白な知性のよろめきであります！」

「やんちゃとは！ 自由とユーモアを愛する同志への匿名の伝言です！」

「やんちゃとは！ 善と悪との……」

「いやいや、私はそういう問答をしたいのではなくてね……もっと具体的に聞かせてくれないか。諸君が素直にイメージするやんちゃな行為とは、どのようなものだ？」

私が穏やかに尋ねると、皆が黙ってしまった。互いに顔を見合わせながら首をかしげている。どうやら質問の意図を図りかねているようだ。私はゆっくりと椅子から身を起こし、杖で身体を支えるように立ち上がって口を開いた。

「やんちゃとは……その言葉自体が美しくノスタルジックな響きを伴うものだ。たとえばそれは、教室のドアに挟まれた黒板消し。ひざかつくん。あるいは牛乳を飲んでいる級友を笑わせる行為。そういった、誰もが持つて生まれた純粹な邪悪さや、無垢なアナーキズムが表面化されたものに他ならないと私は考えている。まあ、年寄りの懐古趣味だと笑われるかもしれないがね……これまで誰も見たことがない、斬新なやんちゃを模索する諸君の姿は美しい。時代に合ったやんちゃを追究する君たちは前向きだ。それを私は心から応援している。——しかし、時として不安にもなるのだよ。我々は、無邪気な背徳感を忘れてはいないか？ 獨創性や芸術性ばかりを重視していないか？ 『我々が成し遂げられる偉大な悪戯』を誇示して悦に入るための、無粋なやんちゃに陥っていないか？」

私はいったん言葉を止めた。ホールは水を打ったように静まりかえっている。

本来であれば、このような状況は避けたいものだ。私が彼らの活動内容に口を出せば、彼らのやんちゃ精神を削ぐことにもなりかねない。もともと権威ある年寄りが、やんちゃな若者に投げかけるべき言葉はただ一つ、「こらっ！」だけであろう。ただでさえ従順すぎる彼らに私から説教をすれば、今後の彼らの活動に悪影響を与えかねない。だからもう充分ではないか。そう思う。しかし今夜だけは、最後まで懸念を打ち明けさせてもらいたい。

私はすつと背筋を伸ばし、少し語気を強めて彼らに問うた。

「いまの我々が——いまの我々が二宮金次郎の像を見たとき、それを金色のペンキで塗装したり、チヨンマゲのかつらをかぶらせたりできるのか？　まして『デラべつびん』を読ませることなどできるのか？　いつの間にか我々は、そういう純粹でベタな様式美を完全に失いつつあるのではないか？」

突然、ホール一階の中央あたりから、すすり泣くような声が聞こえてきた。

すべての会員を知り尽くしている私には、その嗚咽の主が分かる。伊達巻だ。私と同世代で、何十年も共に活動が続けてきた盟友のひとり。彼も同じような不安を抱きながら、ここまで来たのかもしれない。我々の間には「年寄りが無闇に若手を諭すべきではない」という基本的な理念があり——それが無秩序を引き起こさぬよう、会長職の人間には揺るぎのない絶対的なカリスマ性が求められるのだが——一般の古参メンバーは黙って若手を見守ることしかできない。おそら

くは悲痛な叫びを堪えながら活動した日もあっただろう。

ああ伊達巻。我が同志よ。

伊達巻に労いの言葉をかけた。その気持ちをぐつとこらえながら、私は会員たちを見渡した。アリーナ席の左端で、妙に背の高いひよろりとした男が大げさなほど肩を落としている。角煮だ。「やんちゃの魔術師」の異名を持ち、二十代にして幹部入りも検討されている最年少メンバーの彼は、どうやら私の発言に大きなショックを受けているようだ。

ここで彼を腐らせてしまうわけにはいかない。ステージに突っ立ったままの白玉も気の毒だ。そろそろ発表を再開させてやらなければ。

私は腹に入った力をゆるめ、できるかぎりの鷹揚な声を出した。

「何度でも言おう。私には、独創的なやんちゃを否定するつもりなどない。鮮烈な驚きをもって迎えられるやんちゃは優美だ。それを私は本当に喜んで……聞いているか、角煮よ」

私に声をかけられた角煮は、びくりと大きく身体を震わせる。その様子には気づかないふりをして、私は彼を慰めるように話を続ける。

「まったく君の活動は、我々を大いに楽しませてくれたよ。君のスタイルを踏襲してやんちゃを行う会員たちも増えた。新しい波の到来を私は喜んで——私は誰よりも、君の才能を認め、君の手腕を評価してきたつもりだ。しかし同時に、こうも考えている。時には、原点回帰も必要

なのではないかと。時にはシンプルなやんちゃの満足感を思い出せるものがなければ、このままでは歯止めが利かなくなってしまうのではないかとね。最近、そればかりを案じていたのだが——このタイミングでコンクリートに足跡とは。誠に結構なやんちゃではないか？ 実に楽しみだ。さあ白玉、ぜひ続きを聞かせてくれ」

黒頭巾の中からステージ上の白玉に微笑みかけた私は、着席して背もたれに身体を預ける。

少しの沈黙の後、白玉がとつぜん正気を取り戻したように口を開く。

「会長より寛大なるご理解を賜りましたうえ、身にあまる光栄なお言葉まで頂戴いたしました。誠に痛み入ります。まだ申し上げたいことはございますが、会則に則りまして、私からの感謝の言葉は以上とさせていただきます。報告を続けたいと思います……ええ、先ほどお見せいたしましたとおり、これはハリモグラの足跡です。ハリモグラはオーストラリアなどに生息している珍獣で、『ハリモグラ列車』と呼ばれる謎の行動が確認されていることでも知られているのですが——、このハリモグラ列車に関しては、のちほど動画をお見せしながら説明いたしましょう。まずは桜橋公民館のコンクリートにハリモグラの実物大の足跡を残した意図についてお話ししたいと思います。こちらの足跡は、いつの日か『あまり友だちのいない動物博士的なキャラの小学生』に発見されることを願って刻まれたもので……」

*

私が角煮を評価していると言ったのは、決して嘘ではない。

角煮がメンバーに加えられてから初めて発表したプランに、私は度肝を抜かれた。彼はまず、人口が数千人の小さな地域を選んだ。その地域住民の中から毎日、日替わりでランダムに十世帯を選び、その十世帯のテレビだけを狙って「松坂慶子と赤鬼の子どもが出演したクリネックスの怖いCM」を深夜に一度きり、他のCMに差し替えて放映したいと角煮は語った。なかなか楽しそうなやんちゃではあるが、いくらなんでも無理だろうと私は思ったのだ。しかし彼は、やってのけた。

彼の目論見どおり、その地域は軽い集団ヒステリーのような雰囲気にも包まれた。当然だろう。「うちのテレビで、あのCMがいまさら何の説明もなく流れた」という奇妙な話題がちらほらと噂されるようになり、そこから都市伝説も生まれた。とはいえ日本中のほぼ全てのテレビでは、そのようなCMがまったく流れていなかったことが検証されたため、早々に「ただのデマである」と決定づけられた。

にも関わらず、そのCMを実際に一度だけ見てしまう人々が、同じ地域の中で少しずつ増えた。たまたま録画に成功した者が、動画をSNSにアップロードしたこともあったのだが、創作だと

決めつけられただけだった。そして新たな目撃者たちも、同じ現象が自宅のテレビで再現されることはなかったため「気のせいだったのだろう」と必死で記憶を書き換えるようになっていた。すべてが角煮の思惑通りだった。

これまでに角煮が計画し、実行してきた数多くのやんちゃはいずれもスケールが大きく、豊富な技術と知識を要するものでありながら、どこかダークで幻想的でシニールでもあり、じつとりとした独特の魅力を持っていた。それらが私の好みだったことも確かだ。次の理事長に任命されるのは角煮ではないかと噂が立ったのも不思議ではない。しかし彼のやんちゃには決定的な要素がいくつか欠けている。

やんちゃは、頑固そうな大人から叱られるものでなければならぬ。たとえばそれは、近所の怖い老人。PTA会長。校長先生。警察官や政治家や大統領。そのような人物に「不届きな輩がいたものだ！」と憤慨させてこそ初めて完成するものであり、仕掛ける側の自己満足に終わってはならない。さらに言えば、角煮のやんちゃには茶目つ気が不足している。「やんちゃ」という言葉の響きに見合うような可愛げがない。それらは白玉なら決して外さない重要な要素なのだが、なぜ角煮には分からないのだろうか。

『真のやんちゃ心は訓練で培えない。残酷だが先天的なものだ。お前には、それがあ』

私は、偉大なる前会長の言葉を思い出し出していた。

*

白玉の報告に続いて、現在進行中となっている複数の長期やんちゃ案件に関する進捗報告が行われた後、予算報告、次回会合の確認が終わり、やがて閉会の挨拶の時間となった。

「それでは最後に、会長より閉会のお言葉を賜りたいと思います」

司会に挨拶を促された私は、再び杖を使って立ち上がり、口を開いた。

「諸君、誠にご苦勞だった。いつも以上に、君たちの活動を頼もしいと感じる定例総会だったよ。

普段なら、ここで斉唱を行って解散するところだが。……その前に、今日は君たちに重要な報告をしなければならぬ。もちろん悪い話ではないから安心してくれたまえ。嬉しいニュースだ。諸君に、新しい仲間が増えることになった」

私の言葉を聞いて、一部の会員たちは蜂の巣をつついたように騒ぎ出した。悲鳴に近いような声を上げている者もいる。二階席の幹部たちも顔を見合わせながら「何のことだ」「聞いてないぞ」などと盛んに言い合っている。

そう、私は今日の発表について誰にも相談してこなかった。この計画は、私一人が何年もかけ

て進めてきたものなのだから。

「諸君も知つてのとおり、本来ならば新規に参入するメンバーは上級会員五人以上の推薦を受け、実行委員会の承認を得たうえで幹部の審査にかけられたのち、全会員投票で三分の二の賛成票を得なければならぬのだが。今回は私の特別推薦枠を使わせてもらつた」

「特別推薦枠とおっしゃいましたか？」

理事長のトンテキが、立ち上がりながら叫ぶ。他の者は呆氣にとられたように黙っている。

「そのとおりだ」

「会長、誠に恐れながらうかがいます。それは決定事項ですか？ 考え直すおつもりは」

「実は今日、この場に呼んでいるのだ。諸君にも紹介しよう……入りたまえ」

トンテキの言葉を遮るように、私は杖でコツコツと床を叩いた。それを合図にしたように全員が黙りこむ。皆が呆然と見守る中、二階ホールの最後部のドアが音もなく開く。そこには我々とまつたく同じ、黒装束に黒頭巾姿の肉中背の男が不安そうに立っている。

「君たちの新しい仲間、オムライスだ。さあオムライス。挨拶をしてくれたまえ」

「お、オムライスです。よろしく願ひします」

オムライスはあわてて頭を下げる。しんと静まりかえつていた会場が、小さく響めきだした。声が若すぎるせいだろう。彼らに年齢を公開するつもりはないのだが、オムライスは角煮よりも

年下だ。今日からは彼が最年少メンバーということになる。

私は席から離れ、ゆつくりと通路を歩きながら自らの思いを口にした。

「いま、諸君の心には疑念と困惑と嫉妬が渦巻いている。私には、諸君の思いが手に取るように分かる。そうだ、オムライスは諸君とは縁もゆかりもない、ただの野良やんちゃだ……かつての私がそうだったようにね」

再びホールが静けさに包まれる。私はオムライスに合図した。彼はあわてて私の元へと歩いてくる。その肩に手を置いて、私は話を続けた。

「オムライ스가どのような人物なのか、いまはまだ諸君に明かすことができない。しかし彼は我々の組織とは関わることなく自発的に、とんでもないやんちゃを実行した——彼のやんちゃは私に『やんちゃとは何であるのか？』を改めて考えさせるものだった。これは私が見込んだ男。年寄りの一度きりの我儘を許してもらいたい」

そう言つて私は一歩前に出ると、何秒も深々と頭を下げた。幹部席からは息を呑むような音が聞こえる。私が頭を下げたのは、もちろんこれが初めてのことだ。

「もう諸君には分かっているだろう。私がどのような覚悟で決定したのかを。私の進退は今後のオムライス次第だ。事によつては、私が諸君の姿を見られるのも今日が最後になるのかもしれない……できることなら、あと少しだけ諸君の活躍を見守りたいとは思っているのだがね」

私は目を細めてホールを見渡す。全員がじつと私を見つめている。肩を揺らしながら泣いている者もいる。

会長職に就いた人間は、在任中にたった一度だけ、自らの『推薦枠』を用いることができる。異を唱えることは誰にも許されていない。その権限が、どれほどのものであるのか、その行使がどれほど危険なのかは私自身が誰よりも知っている。

かつて「やんちゃの現人神」とすら呼ばれた偉大なる前会長が、会長職を退く寸前に行使した推薦枠。それで入会したのが、この私だからだ。

*

一九八八年二月。私はたった一人で深夜の中学校に忍び込み、校庭に四百四十七個の学習机を運び出して、それを「9」の字に並べた。あの事件の真犯人が私だ。

当時十四歳の少年だった私は、もうすぐ始まる学校行事のスキー合宿にどうしても行きたくなかった。ちよつと派手な事件を起こして学校を混乱させれば、合宿を中止できるのではないかと企んでいた。とはいえ放火をするのでは洒落にならない。なるべく意味不明で、脱力を禁じ得な

い事件を起こしたほうがいいだろう。

ただそれだけの理由で、馬鹿馬鹿しくも綿密で完璧な犯行計画を立てた私は、それを首尾良く一晩で実行することができた。息も凍るような冬の明け方、屋上から「9」の字を見下ろしたときの達成感は決して忘れることができない。あのときの私はもちろん、このやんちゃが全国規模のメディアで連日のように取り上げられるとは想像していなかった。

騒ぎの大きさに畏れをなした私は、自白のタイミングを完全に失っていた。やがて「学校関係者による証言」が次々と語られはじめた。しかし不思議なことに、彼らが詳細に話した犯行現場の状況説明は、私の実際の手口から大きく掛け離れていた。彼らの証言を真にうけた警察は「覆面をかぶった複数の成人による犯行」であると断定した。さらには実行犯と呼ばれる大人たちのグループまでもが逮捕された。

まるで事情が分からず、すっかり怖くなってしまった私は、中学の卒業を待たずに家を出た。それからは偽名と嘘の経歴を使い、身寄りの無い若者として複数の町を転々としたのち、過疎化が進む地方都市のホームセンターで働きはじめた。ある日、その家具売り場に予告もなく現れたのが前会長だった。

前会長に出会った日のことは、いまでも鮮やかに思い出せる。

いつものように職場へ出勤した私は、特売の籐のソファに初老の男性が座っているのを見た。その白髪の紳士は、田舎町のホームセンターには似つかわしくない上質そうなスーツに身を包み、まるでエマニエル婦人のような格好で脚を組んで、じつと私を見ていた。

奇妙な光景だとは思ったものの、あまり気に留めることもないまま商品の陳列をはじめた私に、紳士は言った。

「きみ、ちよつと尋ねたいのだが」

「はい、お探し物でしょうか」

「そうだな、捜しはじめてから、もうすぐ七年になる」

「？」

「単刀直入に訊こう。君は世田谷区立砧南中学校に在籍していた×××君だね」

その言葉を聞いた瞬間、私の身体は凍り付いていた。それは同僚も上司も知るはずのない私の本名だったからだ。

「あの……人違いです。この名札に書かれているとおり、私は」

「君を知ったのは一九八八年の冬だった。あれからずっと捜していた」

紳士は顔の前で指を組み、そこに顎を乗せて語り始めた。

「君を守るために『事件の真相』をでっち上げたのは私だ。いますぐにでも君をスカウトしたい

と思つてね。失踪されたのは残念だった。しかし私の命が尽きる前に、どうにか捜し出せたのは幸運だったよ……私は君を迎えにきたのだ。何も心配はいらない」

初老の紳士は少年のように無邪気な笑みを浮かべていた。しかし、その目には有無を言わせぬ威圧感があった。もう逃げられない。私はそれを悟っていた。

「今日から君はロースカツだ。さあロースカツ、私と行こうじゃないか」
そう言つて彼が差し出した右手を、私は無意識のうちに握っていた。

会長直々に「ロースカツ」のコードネームを授与され、半年後の初回やんちゃ報告会において特別名譽やんちゃ会員の称号を受けた私が、それからどのような活動をしてきたのかは、多くの書物や会報誌に記されているとおりで。

杖を利用し、しゃがれた声で老人のふりをしているが、黒頭巾の下の私はまだ五十にもなっていない。引退には早すぎる年齢だろう。しかし私はオムライスに会ったとき、自分ができることの限界に気づいた。あまりに長く会長職に就きすぎた私は、すでに「偉い人を怒らせる喜び」を思い出せなくなっていたのだ。

*

「……諸君の不安や戸惑いは分かる。しかし世代交代は、いかなる組織でも起こるのだ。決して悲しむべきことではない。私は諸君のさらなる発展を心から祈っている……それでは次回、翌年一月十七日に、同じ場所です」

私がそう言うと、じつと私を見つめていた会員たちが弾かれたように立ち上がった。皆が一斉に右腕を大きく上げる。おごそかなバグパイプの前奏がホールに流れはじめた。

普段の私は閉会時、彼らの斉唱に聞き入るだけなのだが、このあとオムライスが初めてのやんちゃで大きな成果を挙げたとしても、あるいは大きな失敗をしたとしても、私の居場所は即座に失われることとなる。この総会に参加するのは今日が最後かもしれないのだ。久々に歌わせてもらおうことにしよう。私は右手を高く掲げた。

やんちゃに人ありて 人やんちゃたり

やんちゃを求め やんちゃに果て行かん

やんちゃの御前に伏し やんちゃを注がるる

やんちゃを尽くし やんちゃに満たされ

やんちゃせし者 おお、やんちゃ

「ごらー！ またお前らかー！」

やんちゃなる やんちゃなる やんちゃなる我ら おお、やんちゃ
やんちゃに栄えあれ やんちゃに栄えあれ

二〇二〇年十二月九日執筆、二〇二〇年十二月十六日加筆修正

河童ちゃん

河童ちゃん

もしも河童を見たことのある人がいるのなら、その最初の出会いは子供時代の夏休みに訪れるのだろう。見事に晴れ上がった八月の空の下、背の高い雑草をかき分けながら辿りついた河原で、たまたま緑色の不思議な生き物を目撃するのだ。そういう夏休みを過ごしたことのある人なら、大人になってからも人生の節目節目で——たとえば婚約者を連れて帰省した日や、親戚の葬儀に参列した翌日。小雨の降る夕方に、同じ河原で河童に再会するのかもしれない。

でも私には縁がなかった。

少女のときに河童を見なかった私は、この先も河童を見ない。すでに決定している。私は一度も河童に会えないまま終わるほうの人生を歩んでいる。それを確信しているからこそ、私はいま、こうして藤木さんの隣で冷静にハイボールを飲むことができるのだ。

藤木さんが私の部署に配属されたのは二年前の春だった。

初めて彼女を見た瞬間、私は反射的に「河童みたいな新入社員だな」と思った。なぜ、そんな

風に思ったのかは少しも分からない。彼女は河童を連想させるような珍しい髪型でもなかったし、緑色のスーツを着ていたわけでもなかった。とりわけ美人でもないけど決して不細工ではない。どちらかといえば愛嬌のある顔立ちをした、普通の若い女性だ。強いて言うなら上唇の真ん中が少し尖って下を向いている。それぐらいだ。他に河童を連想させるような要素は何もない。

それでも私は藤木さんを見るたびに、なぜか河童のことを考えずにはいられなかった。彼女に仕事の指示を出しているときも、彼女の功績を褒めているときも、あるいはミスを指摘しているときも、私は河童に思いを巡らせていた——そして「なぜ私は、いま河童のことを考えているのだ？」という疑問で頭がいつぱいになっていた。

なぜ「お先に失礼します」と挨拶する彼女に「お疲れさま」と言うたび、「河童つてどこに帰るんだろう」などと考えなければならぬのか。私にはさっぱり分からなかった。

そもそも河童とは何なのだ。妖怪なのか、伝説上の生き物なのか、ツチノコやイエティのような存在なのか。それを真剣に調べはじめてしまったら負けだと思った。負けというよりは「もう帰ってこられなくなる」のではないかと思った。ちょうど川の中へ引き込まれてしまうように、河童に人生を持っていかれるかもしれない。気がつけばスピリチュアル系の本ばかり読んだり、

パワースポット巡りを始めたりする、そういう老後は全力で避けたい。そう思った。

だから私は決して深入りしないまま、雰囲気だけで河童を定義し、雰囲気だけで河童との関わりを否定することにした。つまり河童は空想上の生き物である。そして万が一、実在していたとしても、それに出会うのは少女時代の夏でなければならなかったのだ。中年になってから新橋のオフィスで河童と出会う、なんて話はフィクションでも聞いたことがない。セオリーに反している。だから藤木さんが河童であるはずはないのだ。そう考えることにした。

それでも私の藤木さんを見る目は変わらなかつた。

彼女が入社してからずっと、私は「河童と同じ職場で働く人」になっている。

なにしろ彼女は私の直属の部下なので、月曜から金曜まで、私の斜め向かいのデスクで作業をしている。だから私は毎日、彼女の姿が目に入るたび「河童なのに今日も遅くまで頑張ってるな」とか、「河童もエースコックのカップ麺を食べるんだな」とか、「カーディガンが似合う河童って珍しいかもしれない」とか、なんとなく当たり前のように考えては「いや、彼女は河童ではないのだ」といちいち頭の中で否定しなければならなかつた。

その不可解な現象に戸惑っているうちに。

あるときから私は「河童に会ってない」という事実のほうを疑うようになっていた。つまり私は子供の頃、本当はどこかで河童に会ったことがあるのではないだろうかとしばしば疑うようになってしまった。

すっかり忘れてただけ、あるいは誰かに記憶を消されただけで、実は会っていたのではないのか。藤木さんは、そのときの河童なのかもしれない。

私が思い出そうとすれば、何か重要なことを思い出せるのではないのか。

もちろん、その考えがどれだけ馬鹿げているのは自分でもよく分かっていた。私は決して河童に会ってない。それでも私は、ふとした瞬間「あるはずのない河童の記憶」を脳内に再現しようとする習慣がついてしまった。気がつけば、私の頭の中には河童と過ごした少女時代夏の映像がすっかり出来上がっていた。それは日を追うほど、丁寧にはっきりとしたものになっていく。

大きな吊り橋から見下ろせる谷底の沢辺。何種類もの蝉の音が混ざり合うように響いている、晴れ渡った真夏の午後。あまり風はないけど、なぜか不思議と暑くもない。

国道のガードレールを乗り越え、川面まで続く獣道を下り、そこから少し溪流沿いを上ると、急に水の流れが速くなる。そのあたりからは吸い込む空気がしつとりと重くなり、鳥の音が頭の

上で反響しはじめる。足下にシダが増えて、木の幹や倒木が緑色の苔に覆われていく。その鬱蒼とした溪流の道をもう少しだけ上流へ向かって歩いていくと、ひとときわ立派なブナの巨木が見えてくる。その根元には、びっしりと苔をまとった大きな亀みtainな岩がある。私たちはいつも、その岩の陰で待ち合わせをしていた。

待ち合わせというのは正しくないかもしれない。私が会いにいくと、河童ちゃんはいつも同じ場所にいた。そうだった。私はそれを「河童ちゃん」と呼んでいた。

河童ちゃんは小学生の私よりも少し背が小さくて、薄い黄緑色のつるんとした身体をしていた。頭頂部に乗っている丸いお皿、黄土色のクチバシ、そして背中の大きな甲羅を除けば、ほとんど人間と同じような体型をしていた。でも河童ちゃんの立ち姿は「びよこつと立ち上がってる感じ」だった。うまくは説明できない。

横から見ると、河童ちゃんの両目は顔から少しだけ外側に飛び出していた。犬みたいな、まるまるの黒い目。ときどき瞬きをしていたから、まぶたがあったことは覚えている。睫毛があったかどうかは思い出せない。人間のような形の鼻はついてないけど、クチバシの上のほうに細長い穴が開いていた。あれが鼻だったのだろう、ちょうどアヒルと同じような。

毎年、夏になると私は河童ちゃんに会っていた。どんなきつかけで河童ちゃんと仲良くなった

のかは覚えてない。ただ私は、初めて河童ちゃんを見たときからずっと、なぜか少しも怖いとは思わなかったような気がする。

私が遊びに行くと、河童ちゃんは嬉しそうな声でキュルキュルと鳴き、すぐに私の手を取って勝手に歩きはじめた。河童ちゃんはいつも私に何かを見せたがっていて、私は手を引かれるまま河童ちゃんについていくだけだった。河童ちゃんの緑色の手は冷たくてベトつとしていた。水羊羹みたいな感触だった。わらび餅のほうが近かったかもしれない。

ほとんどの場合、河童ちゃんが私を連れて歩くのは一キロ程度の距離だったけれど、ときどき何時間も歩かされる羽目になることがあった。河童ちゃんは行き先も目的も告げずに進んでいるから、普段よりも遠くまで来たときには「どこまで連れていかれるんだろう。ちゃんと夕飯までに帰れるのかな」と不安になったりもした。

河童ちゃんに会うときの私は普通の運動靴を履いていて、それは溪流治いを歩くのにはあまり適していなかった。ぐらぐらした不安定な石の上を歩くことが多かったからだ。地面に突き出して苔を生やしている木の根も、足を乗せたとたんにぬるつと滑ることがある。でも河童ちゃんが手を繋いでくれているとき、私が転んだことは一度もなかった。

河童ちゃんが私に見せてくれるのは、斜面いっぱいギンバイソウの群生している場所とか、

とても綺麗にバカつと割れている岩の断面とか、なんだか格好いい形をした流木とか、そういうものだった。あとは死にかけのイモリを見せられたこともあった。

河童ちゃんは言葉と話さないけど、私の話はだいたい理解できているようだった。だから私はいつも「綺麗だね」とか「怖いね」とか感想を言うようにしていた。せっかく連れてきてもらったのだから、そういうのを伝えなければ失礼だと思っていたのだ。でも死にかけのイモリときだけは少しリアクションに困った。

目的地でしばらく遊んでいると、いつも河童ちゃんは「そろそろ帰ろう」というように帰り道を指さした。それが遠足の終わりの合図だった。河童ちゃんは時計を持ってないけど、その合図に促されて元の場所へ戻り、それから家に帰ると、ちょうど晩ごはんの時間だった。

もちろん、ぜんぶ想像上の記憶だ。

私の育った町には、綺麗な水の流れる場所なんてなかった。小学生の私が見たことのある川は神田川ぐらいで、それは地面から何メートルも直角に掘り下げられた灰色のコンクリートの水路を鈍く流れていた。まるで巨大な排水溝みたいな川だ。

親戚づきあいの少ない母子家庭で育った私には、「夏休みに田舎に遊びに行く」といった習慣もなかった。忙しい母が、どうにか休みをとって毎年のように連れて行ってくれたのは、神奈川や

千葉の海水浴場だ。楽しかったような気がするけれど、どこも人だらけだった。河童の出そうな場所へ行ったことはない。

実際のところ、私の「本当の夏休み」の記憶は、もうすっかり錆びてしまっている。

やっぱりと私の身体を押し流そうとする海の水。足の裏に伝わる砂の感触。拾い上げた貝殻。そういうものを思い出そうとしても、明確なものがまるで浮かんでこない。ひよつとすると私が年を取ってしまったせいなのだろうか。あれが綺麗だったとか、これに感動したとか、そういう感じが何も蘇らない。

だけど河童ちゃんとの記憶は鮮やかな郷愁に彩られている。斜めに射しこんでくる光芒、後れ毛をくすぐったく揺らす風、渓谷の湿った空気も一緒に思い出せる。さわさわと流れる水、夏鳥の囀り、ヒグラシの声、草木のざわめき、そういつた音も映像に組み込まれている。誰もいない道を河童ちゃんと歩いて、わくわくしたり喜んだり、驚いたり戸惑ったりした、そんな懐かしい日の記憶が次々と湧き出すように蘇ってくるのだ。ぜんぶ嘘なのに。

ぜんぶ嘘なのだ。本当の私は子供のとき河童に会わなかった。だから死ぬまで会えない。

*

つまり、いま私の隣で「ハムカツとポテトサラダと、あとシメサバと韓国風おでんをください」などと淀みなく店員さんに話しかけている藤木さんは、もちろん河童ではない。

だいたい、ここはガード下の飲み屋だ。夏休みの小学生が美しい思い出を作れる場所ではない。こういう店に入れるのも、私がすっかり中年になっているからである。

そのうえ、いまは真冬だ。「仕事納めに軽くどうですか。例の焼鳥屋さんの跡地に、新しい店が入ったみたいなんですよ」などと上司を誘って年末の居酒屋に入り、ハムカツを注文するような河童などいるわけがない。

私は気を取り直すように、目の前に置かれている薄めのハイボールを飲んだ。美味しい。

あまり酒には強くない私でも、仕事のあとの一杯は本当に美味しいと感じる。年の瀬に女二人で居酒屋に行くのはどんなもんだろうとも思っただけ、彼女の誘いに乗って正解だった。

「部長、何かメッセージ着信してますよ。読まなくて大丈夫ですか？」

テーブルの上に置かれた私の業務用のスマートフォンを見て、藤木さんが言う。彼女はとてよく気がつく河童なのだ。河童ではないけれど。

「ああ、もう何を送られても仕事始めまで絶対に読まないよ、って伝えてあるから平気」

「それが正解だと思います」

「あ、もうグラス開いてるじゃん。注文すれば？」

「何か食べ物 came とき、ついでにおかわりお願いしようかと思ってたんですよ。ポテサラとかシメサバとか、すぐ出そうだし」

藤木さんは一杯目の大ジョッキを瞬く間に飲み干していた。彼女は小柄だけど、かなり酒豪だ。酒豪の河童なんて聞いたことがない。いや違うか。黄桜のキャラクターにもなっていたぐらいだから、たぶん河童は酒に強い設定なのだろう。

「……今日は一段とペース速いね」

「あした仕事ないんだーって思ったら、ついガブガブと」

「それぐらい飲めたら気持ちいいだろうなあ」

「部長、ほとんどお酒ダメですもんね。本当はレストランとかのほうがいいのかな」

「いや、居酒屋でいろいろ食べるほうが好き。でも、こういう客って金にならないでしょ。一緒にいる人がたくさん飲んでくれたほうが、気分的に助かる」

「そんなこと言われたら、ポテサラ待たずに二杯目を注文しちゃおうかなって気分」

「好きだけ飲んでよ。仕事納めなんだし」

「じゃあ、もう焼酎にしちゃおう。すみませーん」

藤木さんは嬉しそうに手をあげて店員さん呼び止める。彼女のように陽気な人が、私みたい

なのと一緒に飲んでいて楽しいのだろうか。

*

結局、どうして私が藤木さんを見るたびに河童を連想するのは分からないままだけ。

幸いなことに、彼女と働くこと自体は少しも苦痛ではない。彼女は真面目で素直な働き者だ。少々のんびりしすぎかなと思われる面も多々あるけれど、かなり優秀で周囲への気配りもできる。彼女を悪く言う人など、少なくとも私の部署には一人もない。

そのうえ彼女は、やたらと私のことを慕ってくれている。私の気に入るような居酒屋を次々と探し当てては、私と一緒に飲みに行きたがる。わざわざ就業後に上司を誘う若手など、いまどき滅多にいないだろう。

私も彼女のことは好きだ。一緒に働いているときも、飲んでいるときも楽しいと思う。彼女は愛嬌があつて人懐っこいのに、少しも媚びた感じがしない。頑張っている様子を見せたがらないけど、実際の仕事はきちんとしている。そういう人は珍しいと思う。

彼女が「典型的な河童」だとしたら、私は河童と気が合うような気がする。いつか将来、私が独立するときがあるなら、そのときは河童だけを集めて起業したいぐらいだ。いや、藤木さんは

河童ではないけれど。

*

「ハムカツ来ましたよ」

藤木さんに声をかけられて、私は我に返った。かなり大きめのハムカツが二枚、それを半分に切った四切れが皿の上で湯気を立てている。

「デカいね。思ったより」

「これで三八〇円って、すごく気前よくないですか。パセリもついてるし」

「藤木さん、こういうパセリ絶対に食べるよね。なんで？」

「なんでって。皿に載ってるものはぜんぶ食べていいんですよ、基本的に」

「私も刺身のツマとか、たまに食べるけどさ。パセリは美味しくないでしょ」

「パセリは苦くて美味しいです。ツマのほうがぜんぜん味ないですよ」

「刺身に使ったワサビ醤油つけるし」

「そこまでして食べなくてもいいのに。部長なんだから、もつといいもの食べましょうよ」

「パセリ食べる人に言われたくないよ」

私はハムカツに箸を伸ばした。もう二切れしか残っていない。すでに藤木さんは半分を食べて

しまったようだ。いつの間に食べたのだろう。河童というのは酒豪で早食いなのだろうか。いや、たとえ早食いだつたとしても、河童は猫舌じゃなければおかしいだろう。揚げたてのハムカツを丸呑みするのは河童にあるまじき行為ではないのか。

「……藤木さん」

「はい？」

「そういえば、おでんも注文してたよね」

「ええ。韓国風おでんですけど。もうお腹いっぱいですか？」

「ううん。そうじゃなくて。熱くないのかなあつて」

「そりゃ熱いでしょう、おでんですから」

「そうだね……冬はおでんだよね」

「なに言ってますか。もしかして部長、もう酔っぱらってます？　ちよつと早すぎませんか？」

「まだ平気」

うっかり変なことを言ってしまった。うまく誤魔化せない。少し酔っているのかもしれない。いつも私はハイボールを「薄め」で注文しているけど、いま飲んでるのは普段よりも濃いな、と感じてはいた。初めての店だから加減が分からなくて油断してしまった。ちよつと不安になってきた。河童ちゃんがいなくても、私は無事に家へ帰れるのだろうか。

いい年をして、私は酒の飲み方に慣れていない。こうやって誰かとお酒を飲んだりするような機会が、あまり無かったからだ。

私は子供の頃から人付き合いが苦手で、ほとんど友達を作らないまま大人になってしまった。だから藤木さんが入社するまでの間は、仕事をのあとに誰かと食事へ行くこともなかった。私の部署は男性ばかりで、さらに自分が「気の強すぎる女上司」として部下に嫌われている、という自覚もあつたから、職場では完全に孤立していた。

そんな面倒くさい私を当たり前のように誘って、楽しそうに時間を過ごしてくれる藤木さんは、とても優しい子だと思う。なぜ私は、その可愛い部下を河童よばわりしているのだろう。いや、私が頭の中で考えているだけなのだけだ。

*

そう、私は頭の中だけで藤木さんと河童を結びつけていた。今日までずっとそうだったのに。

「藤木さん、河童に似てるって言われたことない？」

私は、うっかり口に出して尋ねていた。

仕方がなかったのだ。不可抗力だった。ただでさえ酔いが回り始めていたときに、あまりにも条件が整っていたから。

私の隣で焼酎のロックを飲んでいた藤木さんが突然、輪切りのキュウリをグラスに入れたのだ。それも二枚。ポテトサラダの横に添えられていたキュウリを。河童の好物を。

あつ、と思つた私の目の前で、彼女はそれをきゅつと飲んだ。ちょうど上唇の真ん中の尖つた部分をグラスに引っかけけるような仕草で、さも美味しそうに。

それは私にとつて「河童そのもの」の動作に見えた。しかもいま、彼女はぼかんとした表情で目を丸くしている。それがますます河童ちゃんを連想させる。

「え？」

「いや、あのさ」

「なんで河童？ 似てます？」

「変な意味じゃなくてさ。ただ、なんとなく河童っぽいと思つて」

「なんとなくって」

「だつてキュウリ入れたし」

「これですか？ これやる人、けっこういますよ。初めて見ました？」

藤木さんは、ロックの焼酎が入ったグラスを持ち上げて見せた。底にキュウリが沈んでいる。とても普通の人が飲むものには見えない。藤木さんは河童だから、つい習慣でキュウリを入れてしまつたんじゃないのか。私があまり酒のことを知らないからつて、とぼけているだけなんじゃないのか。いや、そんなわけはない。藤木さんは河童ではないし、そもそも河童は実在しない。急に変なものを見たせいで、つい暴走してしまつた。

「うん……初めて見た」

「キュウリ入れたぐらいで、そんなにあわてる人のほうが珍しいと思いますよ」

「いや、普通びつくりするつて。おいおい何やつてんだ、河童かよ、つて」

「これ飲むだけで河童にされちゃつたら、全国の居酒屋が河童だらけになります」

「そんなに一般的なもの？」

「まあまあ一般的です。そういや韓国でも、ソジユに山ほど入れるらしいですよ、キュウリ」

「青臭くならないの」

「これが意外と美味しいんですよ。特に、辛いのとか熱いのとかに合うと思います」

「そうなんだ……」

「なんでそんなにシヨック受けてるんですか」

「うん、自分でもよく分らない」

「つうか河童って何ですか。え、似てます？ そんなの初めて言われましたよ。お酒にキユウリ入れたから。それだけ？」

藤木さんは不可解そうな表情で私を見ている。

知人から突然「河童に似ている」などと言われたら、誰だって良い気分にはならないだろう。失礼だった。藤木さんは私の大事な部下だ。そして私と時間を共有してくれる数少ない相手だ。今日だってわざわざ私を誘ってくれたのだ。彼女から嫌われたくはない。

私は、その場をどうにか取り繕おうとした。

「ほら……藤木さんって、なんか年齢不詳なんだよ。ぜんぜん年とか取らなさそうじゃん」

「や、見たまんまの年だと思えますよ」

「お肌だつて普通の人より瑞々しいつていうか、透明感つうか」

「河童って透明感あるんですか」

「つるつとした質感が、どこことなく河童っぽい？」

「ぼい？ つて言われても」

「だから、そんなに深い意味はなくてさ。藤木さん見ると『夏』って感じがして」

「おでん食べてますよ、いま」

「なんか河原とかにいそうだし」

「浮浪者ですか」

「そういう河川敷じゃなくてさ、もつと綺麗なほうの。爽やかなやつ。せせらぎ系？」

「なんか私、さつきから口説かれてるみたいない気分になってんですけど」

「口説いてないよ」

「なんか意外だな。部長つて、女同士で容姿を褒め合うのとか大嫌いな人かと思つてました」

「いや、褒めたいわけでもなくてさ。どうも藤木さんつて、たまに人間らしくないっていうか」

「そつかー、口説かれてたんじゃなくて馬鹿にされてたのか」

「してないよ」

「冗談ですつて。別に怒つてませんから、そんな必死にならないでください」

そう言つて、藤木さんはキュウリの入った焼酎をくいと飲む。グラスはほとんど空になつていた。いつの間に飲んでいたのである。藤木さんは私ができないことを軽々やつてしまう人だ。

いまだつて、足掻くように話す不格好な私の横で、すすいと酒を飲んでる。

その涼やかな飲み物を、いま彼女は完全に飲み干した。空のグラスに残つたキュウリが、川面の岩にひつかつた葉っぱみたいに見える。

どんな味なのかは知らないけれど、それは彼女に似合う飲み物なのだろうなと思つた。

いつも周囲と衝突しては一人で鬱憤を溜めこんでいる私と対照的に。彼女はすんなりと流れる

ように生きている感じがする。彼女には、夏の溪流みたいなサラサラとした雰囲気があるのだ。それを第一印象で嗅ぎ取った私は、なんとなく河童に思いを馳せていた。それだけのことだったのかもしれない。

「これ、飲んでみますか？」

藤木さんは、グラスに残ったキュウリを摘んでコリコリと嚙りながら言った。

「え？」

「だって、さつきから部長、すごい顔して私のグラス見てる」

「そうだった？」

「これね、焼酎が苦手な人でも飲めると思いますよ。ウリ系の果物が嫌いじゃなければ」

「いや、私は無理だって。そんなの濃すぎて飲めない」

「でも試してみたいんじゃないですか？ ちょっと舐めるぐらいなら」

「いや、ほら、もったいないし」

「残り私が飲んじやいますから大丈夫ですよ。すみませーん。スライスしただけのキュウリを何枚かもらえますか？ あとグラスもひとつお願いします」

そうして藤木さんは、いそいそと二人分の飲み物を作り始めた。

すでに私は普段よりもだいぶ酔っていると思う。そんなものを口にしたら、大変なことになるのではないかと。さつきから、頭も少し重いような気がするの。

「ほら、ちよびつとだけ飲んでみてください。美味しいから」

藤木さんが私にグラスを差し出す。あまり気が進まなかったけど、せっかく作ってくれたものなので受け取った。顔を近づけてみたけれど、焼酎のキツイ匂いしかなかった。

「さつき部長、これ見て『河童かよ』って言ってましたけど」

「うん」

「これ実際に『カッパ割り』とか呼ばれてるんですよ」

「そのまんまじゃん」

「そのまんまですよ」

藤木さんは、ついばむような動作で二杯目のカッパ割りを嬉しそうに飲み始める。それを真似するように、私もグラスに口をつけてみた。

青臭い野菜の風味を予想していた私の口の中で、寒気がするくらい気持ちのいい香りが一気に広がる。これは何だろう。すごく好きな匂い。

目が醒めるほど鮮烈な芳香に驚いた私は、すぐに口を離した。でもそれは、もう私の脳みその深いところまで染みってしまったように思えた。ぐらりと視界が揺れる。香りに飛ばされて意識が

どこかに振り落とされそうだと思った。

その瞬間、とつぜん新しい記憶が増えた。まだ頭に描いたことのない新しい記憶。

*

あれは十歳の夏休みの最終日。理由は覚えてないけど、私は母親からひどく叱られたばかりで落ち込んでいた。

私と河童ちゃんは、いつもの亀みたいな大きな岩の上に並んで座っていた。

その日の私たちはどこにも行かなかった。泣きそうな顔の私をじっと見た河童ちゃんは、何かを察してくれたようだった。その日は私の手を引こうともせず、ただ黙って一緒にいてくれた。だから私たちは座ったまま、何をすることもなく川の流れを見つめていた。

川底の凹凸に流れが当たって、水面に小さな渦ができていた。あそこに指を入れたらどうなるんだろう。私はそんなことを考えていた。

とつぜん河童ちゃんが、面白いことに気づいたような表情を浮かべてキュルキュルと鳴いた。私たちの影と、私の背中とを交互に指さして、ほら、ほら、と言うように身振り手振りで何かを示そうとしている。河童ちゃんが何を言おうとしているのか、私にはしばらく分からなかったけ

ど、何度も同じ仕草を繰り返されているうちに理解した。しょんぼりと岩の上に座っている私の背中が、ちようと河童ちゃんの甲羅みたいな形に丸まっていたのだ。

「同じだね」

私が言うと、河童ちゃんはケケつと高い声で笑った。そのとき突然、いい匂いがしたのだ。

それと同じ匂いが、いま私の鼻腔に広がっている。そのせいで急に思い出した。いや、そうじゃない。逆だ。嘘の記憶に、現実の匂いが移ってしまったのだ。

*

「部長？」

藤木さんが心配そうな声色で、私に話しかけている。大丈夫だ。ちよつと意識が遠のいたけど、まだ私はこつち側にいる。ちゃんと藤木さんの声も聞こえている。ここに帰ってこられた。でも本当は、あつち側にいたかったのかもしれない。そんな気もする。

「やつぱり、焼酎は強すぎましたか？」

「うん」

「無理に飲ませちゃってごめんなさい」

「ううん。ほとんど飲んでないから平気」

そう、飲んではいないのだ。口をつけたただけだから。ちゃんと喋ることもできている。ただ、私の呂律はあまり回っていない。

「気持ち悪いですか？」

「むしろ、きもちいいかもしれない」

「苦手な味でした？」

「ううん。これすぎ。いいにおい」

「ああ、よかった」

「ほんとはね、ごくーつてのみたい。そしたら河童ちゃんに会えるの」

「河童ちゃん？」

「んー」

「なんですか、また河童ですか」

「んー、ごめんねえ」

「なんで謝るんですか。部長つて、たまに変ですよね」

「そうかなあ」

「正直に言えば変ですよ」

「変なのかなあ」

「ええ。だって」

藤木さんは、そこで言葉を止めて片眉を上げた。私は藤木さんの顔を見た。でもアルコールが回っているせい、顔の輪郭が少しぼんやりしている。そのぼんやりとした顔が、ゆっくり私の方へ近づいてくる。急に右側の肩だけ重くなった。そこに藤木さんが手をかけている。

「どうやら藤木さんは、私に何かを耳打ちしようとしているようだ。」

「だって変だと思いませんか？」

耳元でそう言われたとたん、さつきと同じ匂いが、もつと強烈に襲いかかってきた。

それは藤木さんがカップ割りを二杯も飲んでいるせいなのか、藤木さん自身が発しているものなのかは分からない。野生のメロンみたいな匂い。野生のメロンなんてあるのかどうかも知らないけど。

その匂いと重なるようにして、藤木さんの声が私の耳の中へ流れ込んでくる。すっかり酔っている私には、その声が普段より何オクターブも高く聞こえる。

「なんで河童のことばかり思い出すんですか」

「なんでだろうね」

「私、子供のときの部長に会ってないのに」

「そっだよね」

ケケっという懐かしい声も聞こえた。たぶん幻聴だろう。

二〇二〇年十二月九日執筆、二〇二〇年十二月二十四日加筆修正

あとがき、あるいは余計な解説

この三編は、勤務先で辛い目に遭った私が「もうダメだ、明日は仕事に行きたくない。丸一日、家に籠って何かを書くから何かお題をくれ」とツイッターに書き込んだことがきっかけで作られたものです。実際に、先着三名様から頂いたお題で書きました。

できれば全てのお題にお応えしたいと思っていたのですが、昼食のあとにオンラインゲームを始めてしまったことなども影響し、最終的に三つだけとなりました。誠に申し訳ございません。また仕事をサボる機会があつたら残りも書きたいと思います。

現在の私はライターを廃業し、カナダの小学校で先生みたいなことをしております。ぜんぜん文章を書かなくなつたどころか、日本語を使う機会もほとんどありません。娘の運動会で久しぶりに全力疾走する四十代のお父さんを見るような、生ぬるい目で読んでいただけたらありがたいのですが、さすがに考えが甘いですか。

あるグルーマーの独白

長いこと私を応援してくださっているIさんから、「猫が一人称」というお題を頂戴して書きました。

猫の一人称といえ、たいがいの人が真つ先に思い出すのは『我が輩は猫である』ではないかと思ひます。もしも私があれを書こうとしたら、物語を始めるまでに何十行も使つちやいそうだなと予想しておりました。実際に書いてみたら、思つたとおりの結果になりました。

Ｉさんからは昔「そねさん猫を舐めたことあるでしょ」という不可解な因縁をつけられたことがありまして。まあ、正直に「あります」とお答えしましたところ、「ほら、やつぱりなー、絶対そうだと思つたんだー」と半ばキレ気味の声で勝ち誇つたように言われまして。一体、あれは何だつたんだらうと。そんなことを思い出しながら書きました。

Ｉさんはたいへん可愛らしい猫と暮らしています。あなたのはる君は、こんなことを考えちゃいませんで安心してください。

定例総会（前編）

私の永遠のアイドルであられる水戸ひねぎ監督から「やんちゃしちゃうやつ」とのお題をいただきました。まったくもって、ありがたいことです。

しかし監督が数年前にツイッターで語っていらつしやつた「やんちゃしちゃうおつか？」という美しいエピソードの要素を少しも盛り込むことができず、ただ「やんちゃ」という言葉を存分に使つただけの不可解なものが出来上がってしまいました。とにかく何度か「やんちゃ」って言いたかつたのかもしれない。なんだか申し訳ない気分です。

これは「前編」と言い切っているのが後編があるのだろうかと思われそうですが、あえて完結はさせずに前編だけで終わらせることにしました。

実は後編のアイデアが三つありました。それぞれロスカツの正体が「驚くほど常識のない若手ハッカー」「会長が老いらくの恋に落ちてしまった美しい男娼」「エドワード・スノーデン」でまったく違う話、違うオチでした。結局どれも選ぶことができず、それならば無意味なものは無意味なまま終わらせてしまおうと。そのように思ったのです。

ちなみにスノーデンを選んだ場合は、前編のロスカツ登場時の挨拶のセリフを「ヨロシクオネガイシマース」にしなければなりませんでした。やっぱり下らなすぎるから、早く止めたほうが良かったんだろうなって、いま思いました。

何かを書いているとき、面白いのか面白くないのか自分で分からないのはよくあることですが、ここまでさっぱり分からなかったのは初めてだったかもしれません。

河童ちゃん

名曲「河童ちゃん」の作者であられる小野瀬雅生さんご本人から「河童を出してくださいね」とお題をいただいたので、これだけは真剣に書きました。じゃあ他はふざけて書いたのか。ふざけて書きました。すみません、やんちゃ盛りなもので。

だって小野瀬さんってCKBののっさんだよ、のっさんってことは、カウリスマキ映画の関係

者でもあるんだよ。というわけで、真面目に書かなければならない状況に追い込まれたのです。ここまで最初からガチで創作物を書いたことなど、過去にあつたでしょうか。

小野瀬さんの「河童ちゃん」を聞くと、いつも私の頭の中に浮かんでくる情景はあまりにも幻想的で悲しくて綺麗なのですが、それを私が文字で書いたら嘘みたいになってしまっただろうなと思ったので、「だったら嘘の風景にしよう」と決めました。こういうところは無駄に柔軟だよなと自分でも思います。

かなりしつこく書き直しはしたものの、大筋はスラスラと流れるように書いてしまいました。あまりにも当たり前のように、なにも考えずに話が続いていくので、ひよつとしたら私は過去にこういうのを読んだことがあるのではないかと、盗作なのではないかと途中から不安になりました。それは嘘の記憶だ、私は河童ちゃんに会ってないと信じているのですが。同じ話があつたらどうしよう。いまでも少し不安です。

「てめえ、なにげに神田川デイスってんじゃねえぞ」と思われた方がいらつしゃいましたら謝ります。申し訳ありません。北海道の釧路市から杉並区に転校した直後、小学生の私が抱いた素直な感想を許してあげてください。ちなみに私は十九歳のときに、この神田川のコンクリート壁を清掃したことがあります。やや匂いの厳しい現場でしたが、日給一万一千円（しかも即日払い）の素敵な土木作業でした。

小野瀬さんの「河童ちゃん」は、タニシやドジョウのいる湿地に住んでいます。おそらくは、

そういった人里に近いところに住むのが河童のスタンダードなのだろうと思います。しかし私の河童ちゃんも、なぜか溪谷から離れようとしません。小野瀬さんの河童ちゃんに合わせて舞台を変えたかったのですが、どうしても明るく開けたところへ連れて行くことができませんでした。この河童ちゃんは丹沢山塊とか高尾山の六号路とか、そのあたりに住んでいるのだと思います。ちよつと違う種類の河童なのかもしれません。しかし小野瀬さんの影響で、こちらの河童ちゃんもいい匂いがします。

最後に。THE ZERO/ONEで記事を書いていた頃の私は、仕事の原稿以外のものを一度も岡本編集長に読ませたことがありませんでした。そねという名前を使ってニツチな活動をしていたことも話してませんでした。もし岡本さんが生きていてくれたら、いまごろは別の仕事をなさっていたはずなので、ちよつと試しに読んでみてもらいたかったです。本当に悔しくて残念です。

だから皆様、どうかご無事で。くれぐれもお元気で。

二〇二〇年十二月二十六日

江添佳代子（そね）